

鹿児島城下で出土した琉球諸島生産の赤瓦について

西 野 元 勝

はじめに

近年、鹿児島城跡の発掘調査が進む中で、近世瓦の研究が進展している。鹿児島城跡で出土した瓦については、金子智が、軒瓦を軒丸瓦101種類、軒平・軒棧瓦143種類、小菊瓦17種類に分類し、製作技法や瓦当文様の変化からその変遷を示した⁽¹⁾。

また、瓦当文様や刻印に注目した研究が進展する中で、鹿児島城跡には長崎瓦や熊本瓦（天草瓦・土山瓦）、大坂瓦など、他地域の瓦が流入していることが明らかになってきている⁽²⁾。中世にほぼ瓦を生産していない鹿児島では、近世に大量の瓦の需要に応えるため、他地域の瓦を入手していたようである。

他地域で生産された瓦は、層位学的検討ができていない鹿児島城跡の出土瓦の年代決定に有効であるほか、日常使う陶磁器等と違って持ち込まれた背景が推定しやすいことから、他地域との交易の解明等にも有効である。本稿では、現在の鹿児島市街地につながる鹿児島城下出土の琉球諸島生産の赤瓦⁽³⁾について報告し、その時期や背景について検討する。

1 鹿児島県での琉球諸島生産の瓦研究

近世初期、薩摩藩は江戸幕府の許可を得て慶長14（1609）年に琉球王国を影響下においた。薩摩藩は琉球王国を通して中国との交易を行い、一方で琉球王国は、国王や幕府の将軍の代替わりに江戸へ使節を派遣するなど、文化交流を行った。

薩摩藩と琉球王国の関係を裏付けるように、鹿児島城下の発掘調査では、近世の琉球諸島で生産された遺物が出土する。これらのうち、陶磁器については、小田静夫や渡辺芳郎がまとめているが⁽⁴⁾、瓦については、鹿児島城下の琉球館跡の発掘調査で出土した赤瓦が琉球王国産のものとして推定されたのみにとどまる⁽⁵⁾。

2 琉球館跡の琉球諸島で生産された赤瓦

琉球館は、琉球王国からの使節の待機場所で、琉

球との貿易拠点としても機能していた。もともとは、毎年正月にやってくる使者の滞在場所として琉球仮屋があったが、天明4（1784）年に琉球館と改名された。天保年間頃の鹿児島城下を描いたとされる「鹿児島城下絵図屏風」や明治6（1873）年「鹿児島屋形及びその周辺図」では、鹿児島城跡の外堀である吉野橋堀の北側に「琉球館」が描かれる（第2図）。現在の鹿児島市立長田中学校とその東側一帯が推定地となっている。

周知の埋蔵文化財包蔵地としての琉球館跡では、長田中学校校庭整備事業によって校庭内の小規模なトレンチによる確認調査が行われた。調査区中央にある5トレンチからは、石垣塀基礎とその西側（外側）に排水溝が確認されており、これが「鹿児島城下絵図屏風」に描かれた琉球館の外側の塀の基礎で、これより西側が種子島屋敷との間の道であると想定されている。また、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦等の小片を含む赤瓦が出土している⁽⁶⁾。

第3図の1は、軒丸瓦である。摩滅しているが、瓦文様は、草花文で花を横から見た構図の側視型で花や茎、子葉までを表現している側視型1類にあたる⁽⁷⁾。2は、軒平瓦である。瓦当面が逆三角形の滴水瓦で、瓦当文様は草花文様の側視型2類である。

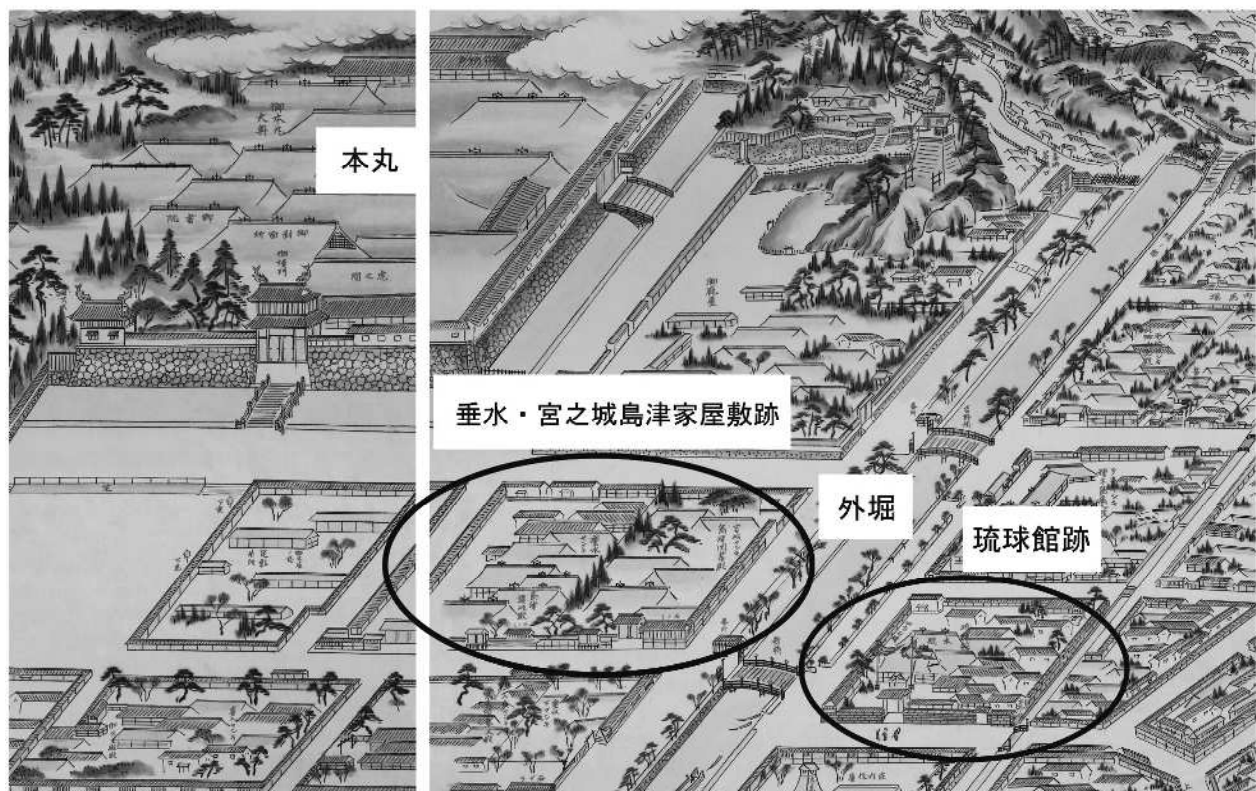
3～5は平瓦で、凹面に布目痕が残る。6～14は丸瓦である。内面に布目痕が残り、外面には縦方向のナデがみられる。14は、凸面はナデ調整で、凹面に縦方向のナデを施し、荒い布目痕が残る。

これらの赤瓦は、琉球諸島特有の瓦当文様をもつこと、九州本土では陶器瓦以外に生産されていない赤瓦であること、平瓦凹面に布目痕があり桶巻き作りでの生産が考えられること等から（九州本土は一枚作り）、琉球諸島で生産された瓦と考えられる。

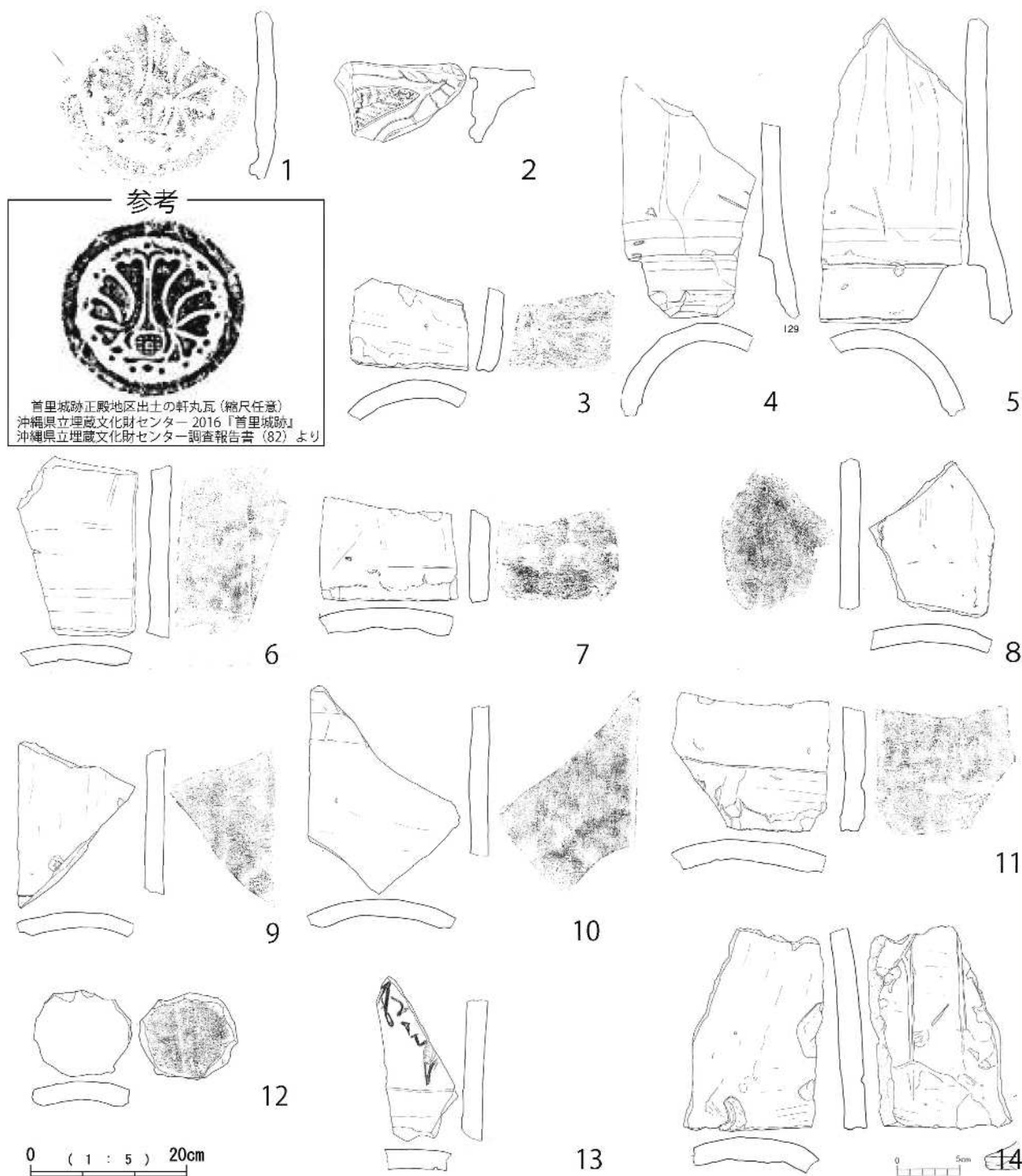
出土した赤瓦は、軒瓦だけではないこと、広い範囲で出土していることから、広範囲に赤瓦が葺かれた建物があった可能性がある。ただし、トレンチ調査で全体の様相がわからず、鹿児島城下周辺で生産されたと考えられる灰色瓦とが混在していることから、赤瓦だけの建物があったのか、琉球諸島で生産された赤瓦と鹿児島城下周辺で生産された灰色瓦の



第1図 鹿児島城下で琉球諸島生産の赤瓦が出土した遺跡

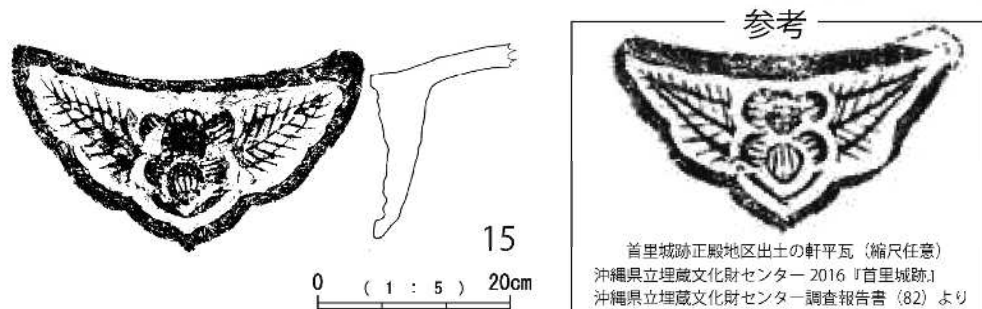


第2図 絵図に描かれた鹿児島城下で琉球諸島の赤瓦が出土した遺跡
(鹿児島城下絵図屏風(玉里島津家資料)を一部抜粋・改変)



第3図 琉球館跡出土の赤瓦

鹿児島市教育委員会 2003『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書—共研公園遺跡・琉球館跡—』（鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（39）より



第4図 宮之城島津家屋敷跡出土の赤瓦

鹿児島県教育委員会 2003 垂水・宮之城島津家屋敷跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（48）より

の両方が葺かれた建物があつたのか、赤瓦で葺かれた建物と灰色瓦で葺かれた建物が混在している状況であつたかは判断できない。

3 宮之城島津家屋敷跡出土の琉球諸島で生産された赤瓦

「鹿児島城下絵図屏風」や明治6（1873）年「鹿児島屋形及びその周辺図」では、琉球館から新橋を通して鹿児島城の北側の外堀（吉野橋堀）を渡ると、西側に宮之城島津家屋敷跡がある。

周知の埋蔵文化財包蔵地である垂水・宮之城島津家屋敷跡は、かごしま県民交流センター（現在のカクイックス県民交流センター）建設に伴う発掘調査が行われ、調査区東側に想定されている宮之城島津家屋敷跡では、琉球諸島で生産された赤瓦が出土した⁽⁸⁾。

第4図15は、軒平瓦である。瓦当面が逆三角形の滴水瓦である。瓦当中央に丸文で表現された花文を置き、その両側に葉を配する。瓦当文様は上原静分類の草花文様の側視型2類である⁽⁹⁾。瓦当部分と丸瓦の接合部分は約100度である。凹面には縦方向のナデを施す。琉球諸島で生産され、持ち込まれた瓦と考えられる。

調査区は、屋敷地全体を調査したわけではないこと、1点のみの出土であることから、建物に伴う瓦かは不明である。

4 琉球諸島で生産された赤瓦の時期と背景

琉球諸島の古瓦は、高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦の3種に分類される⁽¹⁰⁾。このうち、16世紀後半に中国明朝に起源をもつ瓦製法の技術の導入によって生産が開始されたと考えられる明朝系瓦については、初期段階は灰色瓦が主流であつたが、17世紀後半～18世紀前半にかけて赤瓦が主流となる⁽¹¹⁾。鹿児島城下で出土する琉球諸島で生産された瓦は、すべてこの赤瓦で、瓦当文様についても首里城跡等で出土する明朝系の赤瓦に類似しているものがあることから（第3図1、第4図15）、生産年代は上原静の琉球諸島の瓦編年のⅢ期である17世紀後半以降から19世紀末⁽¹²⁾と考えられる。瓦が持ち込まれた時期については、確実なことはわからない。絵図がどこまで正確かという問題はあるが、天保年間頃の鹿児島城下を描いたとされる「鹿児島城下絵図屏風」には、琉球館に瓦屋根の表現はあるが、赤瓦の屋根は表現され

ていないため、天保年間以降に持ち込まれた可能性はある。

琉球諸島では、土木事業の増加や人口増加への対応、森林資源減少・新たな焼き締め陶器生産の導入への対応としての火効率がいい酸化炎焼成の筒窯（登窯）が導入されるなどの技術革新が起き、17世紀後半～18世紀前半には灰色瓦から明朝系の赤瓦が主流になる中で、瓦建物が増加する⁽¹³⁾。このような瓦生産の拡大によって鹿児島城下へ赤瓦を持ち込むことが可能になったと考えられる。

琉球館に赤瓦が持ち込まれた背景としては、自国と同じ赤い屋根の建物を建てるという目的だけでなく、異国情緒を演出するといった効果も期待された可能性がある。

宮之城島津家屋敷は、琉球館とは近いものの、鹿児島城の北側の外堀（吉野橋堀）をはさんでいる。そのため、琉球館のものが混じり込んだとは思えない（第2図）。さらに、瓦当は完全な形で残っていることから、贈答品やコレクション等の何らかの理由で入手し、保管していた可能性がある。今後は、他の上級武士の屋敷跡で同様の出土傾向があるかを確認する必要がある。

おわりに一まとめと今後の課題—

今回は、鹿児島城下出土の琉球諸島生産の赤瓦について述べた。これらの瓦は、すべて琉球諸島で生産された明朝系瓦の赤瓦であり、生産時期は17世紀後半～19世紀末と考えられる。琉球館跡出土赤瓦に関しては、軒瓦以外も出土していることから、琉球館に琉球王国と同じ赤瓦で葺かれた建物を建てる等の目的で持ち込まれたと考えられる。また、宮之城屋敷跡出土赤瓦のように、別の理由で持ち込まれた場合もあるようである。

これまでの鹿児島城下の発掘調査では、瓦は十分に精査されずに選別の対象とされてきた。そのため、今回報告した遺跡以外でも出土していた可能性は否定できない。今後の近世以降の発掘調査では琉球諸島生産の瓦を含めた他地域の瓦が含まれていることを前提として選別・報告に留意する必要がある。

鹿児島城跡で出土する軒丸瓦の中には17世紀末以降、牡丹紋をもつものが現れる⁽¹⁴⁾。牡丹紋が瓦に採用された理由については、島津家の家紋の中に、近衛家から下賜された牡丹紋を省略したとされる島津牡丹を表現した家紋瓦の一種と考えられてきた。しかし、丸に十字紋の家紋瓦が1点も出土していない

こと、牡丹紋の軒丸瓦は16種類以上に分類できることから、家紋瓦ではなかった可能性を考える必要がある。

本論を進める中で、琉球諸島では明朝系の赤瓦が主体となる17世紀後半以降に牡丹紋の軒丸瓦が出現していることを確認した。鹿児島城跡のものは灰色瓦で琉球諸島のものは赤瓦が主体であること、鹿児島城跡の牡丹紋と全く同じものはないという違いがあるが、葉脈を表現するなど、類似している部分もある。牡丹紋は、鹿児島城下で出土する鉢等の琉球陶器にみられ、^{なえしろがわ}苗代川系や^{たての}堅野系の白薩摩と呼ばれる白色陶胎といった薩摩藩内の本土で生産された陶器にも取り入れられている。鹿児島城跡で出土する牡丹紋軒丸瓦についても、琉球諸島の影響や琉球諸島を通じた中国の影響を受けて成立した可能性を考慮する必要がある(第5図・第6図)。

鹿児島城下では、金子智による鹿児島城跡での瓦分類・変遷によってはじめて、近世瓦の全体像が明らかになり、他地域の瓦分類・変遷との比較が可能になった。今後は、沖縄県等の他地域の瓦分類・変遷と比較していくことで、文様のルーツや同範関係等についての研究を進めていく必要がある。

註

- (1) 鹿児島県立埋蔵文化財センター『鹿児島(鶴丸)城跡―北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台跡―』(鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(214)2022年)。
- (2) 前掲注1参照。また、阿比留士朗「熊本県益城町所在土山瓦生産地について」(『縄文の森から』第13号 鹿児島県立埋蔵文化財センター2021年)、西野元勝「鹿児島城跡(吉野堀)出土の泉州谷川瓦―近代瓦の広域流通の一端―」(『黎明館調査研究報告』第36集 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2024年a)、西野元勝「鹿児島城跡出土の県外生産遺物」(『第4回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会発表要旨集』鹿児島県考古学会 2024年b)、西野元勝「鹿児島城跡出土の長崎瓦・天草瓦に関する一考察」(『南九州城郭研究 第4号 三木先生追悼文集』南九州城郭談話会 2024年c)。
- (3) 琉球諸島で生産された赤瓦の分類、年代観等については、池田榮史「沖縄の窯業」(『沖縄県史 各論編2巻 考古』沖縄県教育委員会2003年)、石井龍太『島瓦の考古学―琉球と瓦の

物語』(新典社 2010年)、上原静「琉球王国における瓦生産の画期と展開」(『南島文化』第29号 沖縄国際大学南島文化研究会 2007年)、上原静「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」(『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11号 沖縄国際大学総合学術学会 2008年)、上原静「琉球諸島における瓦生産と古窯の相互関係」(『琉球陶器の来た道』那覇市立壺屋焼博物館2016年)、沖縄県教育委員会『湧田古窯跡(1)』(『沖縄県文化財発掘調査報告書第111集 1993年)、那覇市立壺屋焼博物館『うちなー赤瓦ものがたり』(2021年)などを参照した。

- (4) 小田静夫「海を渡った壺屋焼陶器」(『壺屋焼博物館紀要』第4号 那覇市立壺屋焼博物館2003年)、渡辺芳郎「鹿児島県本土出土の近世沖縄産陶器」(『陶磁器の社会史』吉岡康暢先生古希記念論集刊行会 2006年)。
- (5) 鹿児島市教育委員会『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書―共研公園遺跡・琉球館跡―』(鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(39)2003年)。
- (6) 前掲注3。
- (7) 上原静「琉球王国における瓦生産の画期と展開」(『南島文化』第29号 沖縄国際大学南島文化研究会 2007年)、上原静「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」(『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11号 沖縄国際大学総合学術学会2008年)。
- (8) 鹿児島県立埋蔵文化財センター『垂水・宮之城島津家屋敷跡』(鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(48)2003年)。
- (9) 前掲注7。
- (10) 大川清「琉球古瓦調査抄報」(『琉球政府文化財調査報告』1962年)。
- (11) 前掲注7。
- (12) 前掲注7。
- (13) 前掲注7。
- (14) 前掲注1。

〈謝辞〉以下の方々・機関から御教示・御指導を賜った。記して謝したい(敬称略・五十音順)。

池田榮史、金子智、黒川忠広、関昭恵、徳永愛雄、長野陽介、中村友昭、竹森友子、深港恭子、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島市教育委員会

(にしのもとかつ 本館学芸課主査兼文化振興課 鹿児島城跡保全整備班)



第5図 首里城跡正殿地区の牡丹紋軒丸瓦

沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『首里城跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書（82）より

			
軒丸瓦分類 B-001	軒丸瓦分類 B-002	軒丸瓦分類 B-003	軒丸瓦分類 B-004
			
軒丸瓦分類 B-005	軒丸瓦分類 B-006	軒丸瓦分類 B-007	軒丸瓦分類 B-008
			
軒丸瓦分類 B-009	軒丸瓦分類 B-010	軒丸瓦分類 B-011	軒丸瓦分類 B-012
			
軒丸瓦分類 B-013	軒丸瓦分類 B-014	軒丸瓦分類 B-015	軒丸瓦分類 B-016

第6図 鹿児島城跡の牡丹紋軒丸瓦

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2022『鹿児島（鶴丸）城跡—北御門跡周辺・御隅櫓跡周辺・能舞台跡—』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（214）より